

『二十歳の原点』母は反対した

高野アイ (高野悦子・母)



高野悦子氏

娘の遺した日記が『二十歳の原点』として出版されたのは、七一年のこと。立

命館大学の学生だったカッコ(註・悦子さんのあだ名)は、その二年前、六九年

そのノートだけ宿泊先にもち帰って、一晩寝ないで読みました。それ以来、私は本を読んだことがない。ほんとうに、文章というものが怖くなるくらい、娘の日記は赤裸々で、衝撃的だったんです。

六月二十四日に、京都市内の国鉄山陰線に身を投げて亡くなりました。学生運動の盛んだった時代、娘もデモなどに参加しており、親としてはとても心配していた、その矢先の娘の死だったので。

へと自分を駆り立てていたようです。六月十七日、私は京都に娘を訪ねました。西那須野(栃木県)の家に残った夫と相談し、無理に連れ戻すことは言わないでおこうと決めていたので、河原町で買物をして過すことに。普段は甘えた素ぶりを見せないカッコも、その日は私にワンピースをねだりさえしたんです。

同人誌「那須文学」に載った日記の断片が東京の出版社の目にとまり、刊行を勧められたとき、私は絶対に反対でした。娘の個人的な記録が、大勢の人の目に触れるなんて、滅相もない。すると編集者が「奥さん、女の子はいつかお嫁にやらないきゃいけない。私にやらせてくださいませんか」と。その後、全国のかたからお手紙をいただき、それにお返事することでも日を過ぎていた時期もあります。

『二十歳の原点』は話題を呼び、その後『二十歳の原点序章』『二十歳の原点ノート』と続篇が出て、合計三百万部超のベストセラーとなったと聞いております。

京都駅であらためて向いあい、「いっしょに帰ろう」という言葉が出かかったんですが、呑みこんでしまった。あの子連れ帰っていけば、と、悔やまれてなりません。那須に戻り、娘が所望していたものを段ボールに詰めて送りました。

カッコは、私は慣らされる人間ではなく、創造する人間になりたい。「高野悦子」自身になりたいと書きましたが、私も、幸せな時分は、かわいそうなぐらい素直で、慣らされてしまっていたのですね。夫唱婦随で暮してきた主人が亡くなってから、ふっと、むかし読んだ『人形の家』のノラの存在を思いだし、

カッコはとてもやさしい子でした。張りつめたようなその純情さは、日記からもすぐ感じとっていただけのことだと思います。六九年、大学三回生だった娘はとくに運動じたいに批判的な眼を向けながらも、(国家権力との対決なくしては、人間は機械になってしまう)と、「闘争」

の数日後。京都府警で遺体と対面したときは、なにも考えられませんでした。下宿に戻ると、私の送った段ボールが封も開けずにそのままになっていた。そして机のなかに、日記を発見したのです。

目覚めた気がしたことがありました。の。それも娘の影響でしょうか。